



レンブラント絵画の中の「脳と神経」

森 望*

昨年末の編集委員からのクリスマスプレゼントと銘打たれた『芸術家と神経学』(2021年12月号)は、コロナ禍の重苦しい空気の中で、思いがけずふらっと過去の歴史と欧洲への小旅行をさせていただいた、そんな気のするありがたい特集だった。今回取り上げられた芸術家以外にも、ピカソ、ムンク、ダリ、あるいは有名なエリック・カンデルによる『神経科学』の「知覚」の章の扉絵にある相貌失認を患ったチャック・クロスの自画像¹⁾や、自閉症と言われるスティーブン・ウィルシャーが一瞬にして描き上げる大都市の精密な鳥瞰図²⁾などを思い起こせば、いつかまたこんな特集の続編に出会えることを期待したくなる。

表紙にあったゴッホの《夜のカフェテラス》の店先のチェアにそっと腰掛けて夜空を見上げれば、一見、綿帽子のようにも見える大きな星が輝いている。歴史上あまたいる科学者や芸術家の中で、この星のように輝く巨星はそう多くはない。そんな中でも、17世紀オランダのレンブラント・ファン・レイン(Rembrandt van Rijn, 1606~1669)がそんな巨星の1つであることを疑う人はないだろう。ここでは、この『芸術家と神経学』の特集にからめて、レンブラント絵画に見られる「BRAIN and NERVE」について言及しておきたい。

アムステルダム国立美術館、その入口から中央のホールをまっすぐに進むと、真正面にレンブラントの《夜警》(1642)が現れてくる。この大作はレンブラントが36歳のときに描いた市の警備ボランティアの、いわゆる集団肖像画である。写真のない時代に、自分たちの姿をその職務がわかる形で画家に描いてもらう、そんな集合写真のようなものだった。

実は、レンブラントは、この絵を依頼されるより10年も前の1632年に、アムステルダムの外科職人組合の役員たちの集団肖像画を描いている。それが、

《テュルプ博士の解剖学講義》(1632)である(Fig. 1A)。28歳で絞首刑となった窃盗犯アリス・キントの前腕解剖の場面なのだが、そこには手指を動かす重要な筋肉群、すなわち親指への長母指屈筋、人差し指以下4本の指への浅指屈筋、小指を外に開く小指外転筋などが見てとれる。その外転筋に沿って「尺骨神経」が白く走り、手の付け根(手根部)で浅枝と深枝に分岐する「尺骨神経管(ギヨン管)」の部分が白い筋として描き出されている。一方、親指の分岐部には「正中神経」の枝の「総掌側指神経」とおぼしきものが見てとれる。

レンブラントは後年、50歳のときに再び外科職人組合の集団肖像画を描いた。それは《デイマン博士の解剖学講義》(1656)で、こちらは「脳解剖」である(Fig. 1B)。現存の絵には肝心のデイマン博士の顔がない。レンブラントの死後、1723年、外科組合の役員室の火事で絵の周辺部分が焼失してしまったためである。ここに見える1人の助手ガイスペルト・カルクーン(当時34歳)のほかに7名の組合幹部の姿があったはずなのだが、今はそれを見ることができない。しかし、幸い脳解剖の部分ははっきりと残っている。22歳で絞首刑となった強盗殺人犯ヨリス・フォンティンの遺体だが、頭蓋を開いて大脳と小脳の間の硬膜(おそらく「大脳錐」か「小脳テント」の一部)を取り出す様子が描かれている。脳の実質を解剖している場面ではない。当時はまだ、脳の中身についてはほとんど関心が向かない時代だった。

このようにレンブラントは生涯で2枚の解剖図を描いた。興味深いことに、そこには幸い「脳と神経」があった。別にレンブラント自身がそれに興味があったわけではないのだろうが、外科職人に人体解剖を指導したテュルプ博士やデイマン博士からその重要な意味を教えられたものと思われる。そうでなければここ



Fig. 1 レンブラント絵画の中の「BRAIN and NERVE」
A:《テュルプ博士の解剖学講義》、B:《デイマン博士の解剖学講義》
ここに描かれている人物は全員特定されている。Aの下段左からヤコブ・コレベート、アドリアーン・スラベラーン、ヤコブ・デ・ウイッテ、マッタイス・カルクーン、上段左からフランス・ファン・ルーネン、ヤコブ・ブロック、ハルトマン・ハルトマンゼン。皆、当時のアムステルダム市内の外科職人(シルルゲイン)組合の幹部だった。Bにはデイマン博士の助手を務めたガイスペルト・カルクーンが併んでいる。彼は、Aの絵で、テュルプ博士のすぐそばで熱心な眼差しでみつめるマッタイス・カルクーンの末息子だった。したがって、このカルクーン親子は、レンブラントにその姿を描かれた、ある意味では最も幸運な親子だったとも言うことができる(詳しくは文献4参照)。

まで精緻に描き出すことはしなかったんだろう。レンブラントは遺体解剖の現場だけでなく、そのほぼ百年前の解剖学の分野における古典的名著であったアンドレアス・ヴェサリウスの人体解剖図譜『ファブリカ』の図を参照していたようにも思える³⁾。また、デイマン博士の解剖図での構図にはイタリアルネサンス期の巨匠アンドレア・マンТЕニヤの影響も色濃く見てとれる⁴⁾。

今の時代から振り返ると、もしもこのとき、デイマン博士が脳を取り出して大脳縦列で左右に二分して内部を見せていたら、レンブラントはそれをどう描き、また何を感じただろうか。当時はまだデカルトの時代で、脳室の空洞部分に精神が宿るという中世的な考え方からようやく脱却しようとする、そんな時代だった。脳科学は、無論、まだまだ未熟だったのだが、レンブラントは幸い「脳と神経」を描いてくれていた。この

ように神経科学の視点でレンブラント絵画を見直してみれば、またそれなりの感概も生まれてくる。

文献

- Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM, Siegelbaum SA, Hudspeth AJ (原著), 金澤一郎, 宮下保司 (日本語監修): カンデル神経科学. メディカル・サイエンスインターナショナル, 東京, 2014, pp437-438
- Stephen Wiltshire Official Website
<https://www.stephenwiltshire.co.uk> (最終閲覧日: 2022年6月2日)
- フランク・イペマ, トーマス・ファン・ヒューリック (著), 森望, セバスティアン・カンプ (訳): オランダ絵画にみる解剖学. 東京大学出版会, 東京, 2021
- 森 望: レンブラント絵画にみる画家と外科医のクロストーク. 西洋美術研究 21: 2022, 印刷中

